

1988-17

特集 ● 資本主義

資本主義とアジアの戦略

日本と中国の近代化をめぐって

橋爪大三郎

日本が中国に先んじて、近代化に成功した理由のひとつは、日本がかつて中国の社会制度を導入しつつも、それを独自に運用し、固有の社会慣行を維持していたことにある。中国の社会制度とは、律令体制であり、仏教・儒教である。日本固有の社会慣行とは、天皇であり、武人の統治である。この相反する要素の共在が、近代資本主義を受け入れる土壌となった。

中国は、資本主義の代わりに社会主義を受け入れた。しかし近代化は、まだこれからである。中国が来世紀に、巨大国家として再登場することは間違いないとしても、それを可能にする社会的な諸条件（資本主義からなにを吸収するか）を、いま詰めておく必要がある。

1 聖徳太子と日本の古代戦略

最近でこそ日本は、中国のお手本と考えるようになりましたが、それまで千年以上のあいだ、その反対に、中国がずっと日本のお手本でした。その間、日本が中国から受けた恩恵は、数知れないのです。

日本の歴史を方向づけるにあたって、もっとも重要な仕事をしたのは、聖徳太子です。彼は推古天皇（女帝）の甥で、当代随一の知

識人でもあります。摂政の地位にあって、六世紀の末から七世紀にかけて、日本を指導しました。

当時の政治状況は、不安定なものでした。一方で、物部氏などの豪族は、日本の伝統を代表し、もう一方で渡来系の蘇我氏は、海外貿易を基盤にしています。両者の対立は、日本の固有信仰・対・仏教というかたちをとりました。

聖徳太子の業績は、三つあります…

- (1) 遣隋使を派遣するなど、中国文化の移入に国家をあげて取り組んだ。
- (2) 十七条の憲法、冠位十二階の制を定めるなど、合理的な国家統治機構を整備した。
- (3) 『法華義疏』『勝鬘義疏』『唯摩義疏』を著して、大乘教（仏教社会主義）を国家の中心政策にすえた。

彼は当時の日本が、世界的な水準（すなわち中国）からみて、著しく遅れていると痛感しました。そこで日本を、世界の一流国家に建設するため、中国の文物、制度を移入することが不可欠であると考えたのです。その一方で、彼は、日本と中国は同じでないから、制度も一部変えないとうまく機能しないだろうとも、考えました。「和をもってとうとしとなす」という十七条の憲法の有名な条文に、それがよく表れています。（ちなみに、これは、日本の社会法則を取り出したものと考えられます。私は『仏教の言説戦略』のなかで、それを「Togetherness」の優越^{*}として、モデル化しました。）それから仏教は、隋唐帝国の柱のひとつ（鎮護国家の思想）で、当時の先進思想でもありませんでしたから、保守勢力を駆逐し、思想改造をはかるのに欠かせないものでした。

^{*} 聖徳太子の構想は、天皇を中心とする律令国家を樹立することでした。天皇を、豪族とは違った、中国の天子に相当するものにしようとしたのです。

照的です。中国では、いくつかの王朝が交替しましたが、支配の原理や構造は似通っています。そして、その正統性は、断絶していません（易姓革命）。これに対して、日本では、支配体制が徐々に質的に違ったものに変化していきました。にもかかわらず、正統性が連続している（断絶していない）のが特徴です。この歴史の違いが、両国の近代のあり方の差異をもたらしたように思います。

^{*} 日本の支配体制の変化を順にたどると、つぎのようです。

- (1) 王朝国家体制……京都を中心とする、荘園貴族の支配体制
- (2) 鎌倉幕府体制……鎌倉をもうひとつの中心とする、武士同族の支配体制
- (3) 戦国領国制……各国を一円支配する、武士集団の支配体制
- (4) 江戸幕藩体制……全領国を統括する、武士集団の支配体制

（もちろんこれは、ごくおおまかな分類です。たとえば、(1)はさらに、側近政治／摂関政治／院政と分けられます。また、(2)と(3)のあいだには、室町幕府の支配が入ります。）

これらの体制は、ますます、律令国家のあるべき姿とは似ても似つかないものになっていきますが、それでも、聖徳太子の構想の枠内にあります。そればかりか、明治以降の日本近代化の過程も、大きく規定していると言えましょう。

なぜ、支配体制が徐々に変化していくのか。それは日本人が、律

この構想が現実のものとなったのは、六四五年の、大化の改新です。クーデターは成功し、政界の中心だった蘇我氏の勢力が一掃されました。首謀者の中大兄皇子（のちの天智天皇）と中臣鎌足（藤原氏の始祖）は、律令国家を建設し始めます。（実際に律令が制定されたのは、八世紀の初めです。）

この時期、白村江（朝鮮）で唐・新羅の連合軍に敗れた日本は、中国に追いつき追い越すため、「四つの古代化（＝現代化）」（この用語は小室直樹氏による）の旗を高く掲げました。

第一は、政治・社会制度の古代化。具体的には、律令制、官制、軍事組織を導入・整備することです。

第二は、経済の古代化。すべての土地を国有地（天皇の領地）とし、人民に均等に土地の耕作権を与えました（班田収受の法）。そしてこれを、国税（租庸調）の基礎としました。

第三は、科学技術の古代化。外国人を招いて、建築・医療・暦法・美術そのほかの導入をはかりました。

第四は、イデオロギーの古代化。仏教を国教とし、僧侶を国家公務員とするいっぽう、全国に国分寺を建てました。

この四つを政策の柱として、律令国家ができあがります。この時点で、日本は中国とそっくりになったようにみえました。しかし、この体制は、日本に定着せず、すぐさま変容していきます。

2 武人の統治

中世から近代にいたる、中国と日本の歩みを比べると、まさに対

令国家（中国的な支配の原則）を理解しなかった（好まなかった）からでしょう。日本人には、およそ原則というものを好まない傾向があります。原則に反する行為でも、長い間続いているうちに、もとの原則をおしのけて正当な慣行となります。そのため次第に、違った支配体制に移行していくことができます。

こうした変化にもかかわらず、正統性を連続させているものはなにか。それは、天皇の存在です。天皇は、中国の皇帝と違って、政治の実権をもちません。天皇は、律令制以前からの古い伝統ですが、聖徳太子はそれを、律令官制の中心におきました。それは、政治抗争から独立した場所で、支配の正統性を担保します。

^{*} 中国から日本に伝わった思想で重要なものは、仏教と儒教の二つです。このうち、江戸幕藩制で大きな役割を担い、明治維新の原動力にもなったのは、儒教（特に朱子学）です。そこでまず、中国での儒教の機能について簡単にふれてみましょう。

中国の伝統的な支配体制（中華帝国）は、上下の二段階にわかれたピラミッド型の構造をしています。下段は、宗族や村落共同体からなり、主に血縁原理が作用します。これだけでは国がばらばらになっってしまうので、もっと普遍的な原理が必要です。それを与えるのが国家機構で、儒教十科挙のかたちで完成しました。科挙の試験は、血縁原理を排除することを目的とし、儒教の内容は、下段の民衆の日常倫理（道教）にも連続するものになっています（修身→商家↓治国→平天下）。

中国の文化は、この支配体制に合致するように発達しました。国家を指導するのは文人官僚であり、彼らの知識を統一することで、国家を統一するからです。このように、文化と国家権力とは、密接に関係します。

最近注目を集めつつある NIES (newly industrialised economies) の、共通する特徴として、儒教があげられます。また、日本の特に江戸時代に、儒教の影響が強かったとも言われます。けれども、日本の儒教は、中国とまったく違った社会的機能をもちました。日本の支配体制は、中華帝国の場合とまったくちがった編成をとっているのだから、これは当然です。

日本が、中国と決定的に違うところが、武人の統治(武士の幕府政治)です。武士は、アジアでも日本にだけ自生した制度で、西欧によく似た封建制をなりたせました。

武士の起源は、荘園の私的なガードマンです。朝廷(天皇の政府)の高級官僚たちは、地位を世襲するようになって貴族化し、律令の例外規定をこしらえて、国有地の大部分を私有地(荘園)にしてしまいました。この私有は、律令法制のなかで必ずしも正当化されません。それを経営・管理するために、物理的実力が必要です。王朝国家体制の内部で、武士(貴族の私兵)がうまれます。

武士は、人格的な社会関係(忠誠)を軸に、同族団を形成し、貴族から独立して、荘園を次第に自分たちのものにしていきました。彼らの土地所有は、慣行によるもので、王朝国家の法体系によって

は正当化されません。そこで、その正当化を保証(本領安堵)するために、鎌倉幕府がうまれました。幕府の長(征夷大將軍)は、律令官制(王朝国家)のなかに、一応の場所をもっています(令外の官)。

このように武士の政府は、もともと知識と全く無関係です。
*
武士の支配体制では、権力と知識が分離します。武士の権力は、知識によって獲得されたわけでもないし、知識によって維持されているわけでもありません。そのため、日本では、テキスト(知識)と権力のあいだに距離があります。それに対して、中華帝国の文人支配の場合は、テキスト(知識・文化)も権力の一部です。

外国の事情に目覚めた日本の知識人が、江戸幕藩体制(武士の支配)を打倒して、近代国家を形成できたのも、いまのべたことと関係があるでしょう。そこで、幕藩制と儒教について、つぎに考えます。

3 幕藩制と尊皇思想

日本の近代化をどう理解するか、ふたつの議論があります。ひとつは、マルクス主義の議論。もうひとつは、ウェーバーの議論。

マルクス主義は明治維新を、①絶対王制の成立、あるいは、②ブルジョワ市民革命、とみます。けれども、戦前の天皇制を、ヨーロッパ歴史学で割り切ってしまうのは、問題です。

戦後の知識人(特に、近代主義者といわれる人々)に影響力があつ

たのはM・ウェーバーです。丸山真男(政治学)、大塚久雄(経済学)、川島武宜(法学)らが、代表的な人々です。

ウェーバーは、プロテスタントの世俗内禁欲が、資本主義の経済倫理の成立に、決定的に重要な役割を果たしたことを強調しました。彼の『経済と社会』は、主要な宗教を比較社会的に分析して、ヨーロッパ世界(のみ)が近代化に成功した原因を説明することを試みました。

丸山真男はこれを受けて、政治における近代化のポイントを「作為の契機」に求めました。市民が自覚的に(社会契約の考え方によって)国家権力を構成した、ヨーロッパ近代をモデルにしたものです。そして江戸時代の知識人の思想にも、そうした「作為の契機」をみつめました。江戸時代の儒教のいろいろな学派のなかで、荻生徂徠の思想にそれがいちばん現れている、というのが丸山真男の説です。(そのほかにも、近代の芽生えを、心学にみとめる説、禅の思想にみとめる説、などがあります。)

丸山説の通りだとすると、ヨーロッパと関係なく日本にも、独自に近代的な政治意識が育っていたことになります。丸山真男は、一九七〇年ごろまで、圧倒的な影響をもっていましたから、これが通説になりました。

*
それに対して、反論も現れました。私が重要だと思うのは、山本七平(宗教研究・日本学)の説です。

丸山説が正しいのなら、荻生徂徠の学派が、明治維新で主導権を

とつてもよさそうです。けれども、実際に明治維新の原動力となつたのは、尊皇攘夷思想であり、その中心となつたのは山崎闇斎の学派(崎門学)でした。闇斎学派だけが、江戸幕府の正統性を否定し、

天皇を中心とする体制に復帰すべきだと主張したのです。そして、神道とも関係を深めてゆきます。山本七平はこの事実注目し、その理由を詳しく分析しています。(丸山真男も最近、闇斎学派に関する論文を書いています。また論旨が明確ではありません。)

この問題は、明治維新と明治天皇制を考えるうえでも重要です。
*
江戸幕府は、儒教(朱子学)を、正統の教義に採用しました。これは、幕藩制の支配構造と密接に結びついています。同時に、矛盾をはらんでいます。

江戸幕府は諸侯(藩主)の連合体です。諸侯は、戦国領国の支配者(の子孫)であり、彼らの家臣団(武士)を擁しています。諸侯の一つである徳川家は、征夷大將軍としての資格で、諸侯のうえに立ちます。「徳川の平和」は、戦国乱世に終止符をうち、潜在的に对立している諸侯の関係を現状のままに固定したものです。

もともと戦闘集団である武士の、戦闘を禁止する——そのためのイデオロギーとして、儒教(朱子学)が選ばれました。そして、儒教を、武士の主従関係や家制度を支える倫理として、読みかえました。これは、中国儒教本来の姿から、かなり逸脱しています。

幕藩制の組織は、戦国時代以来の武士団の集まりですから、儒教と関係ありません。朱子学は、科挙(試験)と結びついて正統学説

の地位をえたのですが、幕藩制が科挙を採用する余地はありません。知識（テキスト）と権力とは、分離しています。

幕藩制の儒学には、両極の可能性があります。ひとつは、幕藩制（武士の支配）を所与とし、それに合わせて儒教を解釈するもの。もうひとつは、儒教のテキストを所与とし、幕藩制を批判するもの。閻斎学は、後者の可能性をつきつめたものです。

* 徳川家が諸侯のうえに立つのは、將軍としての權威によります。そして、將軍は天皇の任命によります。ゆえに、幕府は、天皇の正統性を否定できません。幕藩制も、その正当化を、律令制においているのです。

儒教のテキストにそくすなら、やはり天皇の支配が正統であることとなります。閻斎学は、なぜ天皇が武士に政治の実権を奪われたか、考えました。「失徳の天皇論」によると、天皇が支配者としての徳を欠いたから、実権を奪われた、といえます。逆を言えば、天皇が徳をそなえるならば、武士から政治の実権を奪いかえす（べきだ）、ということになります。こうして、儒教のテキストを読む武士のなかから、尊皇思想が育まれます。そして、このエネルギーは、ヨーロッパ勢力（夷敵）の登場と幕府の対応のまずさを機に、いっぺんに盛り上がりました。

4 ナシヨナリティの形成

明治維新は、王政復古、すなわち、大化の改新の体制に復帰する

二大政策としました（富国強兵）。そして、欧米列強の真似をして、当然植民地を持たなければならぬと考えました。

一九四五年にいたる日本近代の歩みは、同時に、戦争の歴史でもあります。その前半の期間、日本は防衛的にふるまいました。たとえば、朝鮮に侵出したのは、朝鮮がロシアの支配下にはいるのを恐れ、朝鮮に侵出したのは、朝鮮がロシアの支配下にはいるのを恐れたからです。政府の指導層は、日本が弱体なことをよく心得ており、イギリスその他の列強の支持と承認なしに、自分勝手な行動をとることはありませんでした。それに対して、第一次世界大戦が終わるところからの日本は、次第に拡張主義となり、侵略的となりました。そして、中国全体を勢力下におこうとして、アメリカと衝突するにいたったのです。

日本がこの時期になぜ、侵略的な国家となったのが問題です。中国侵略は、日本の資本主義と近代化にとって、必然だったのか、それとも偶然的要因によるのか。日本人はまだ、この点をはっきり考えていません。

一九七〇年ごろまでは、戦前／戦後の断絶を強調する議論が大勢でした。戦前の日本人は、一部の好戦的な人々（軍部）に「騙されて」いた、というのです。それは誤りだと思います。日本人は、多かれ少なかれ、積極的に戦争を担いました。そして、戦前の社会・戦後の社会には共通する要素も、少なくありません。そこで私は、この時期を、昭和の「大動員体制」とみる事ができる、と思います。

ことだと考えられました。すなわち、天皇を中心におくこと（一君万民思想）によって、武士の封建的主従関係を破壊し、武士の支配をうち破ることができたのです。旧体制を一掃するために、一時的に復古的なイデオロギーが必要でした。

天皇は、日本が、国家の単位で統一を達成するための、重要な鍵でした。そして明治の体制も、大きくみれば、聖徳太子の構想の延長上にあるといえます。すなわちその時代の、世界的な水準にある文明を手本にし、そっくり移入して、国内の制度にすること。そのための窓口を、まず国家（天皇）が独占すること。

六十六頁にある、四つの「古代化」を、そっくり「近代化」と置き換えれば、そのまま明治政府の政策になります。日本はその手本を、フランス、イギリス、ドイツ……と探しまわりました。一九四五年の敗戦後は、アメリカがそれにとって代わりますが、日本の政策の根本は変化しなかったと言えます。

* さて、中日両国にとってもっとも不幸な出来事は、日本が中国を侵略し、植民地としたことでした。

日本は、阿片戦争（中国の敗北）に衝撃を受けました。そして、欧米列強の植民地となることを恐れました。その結果、長州と薩摩が同盟することにもなり、江戸幕府が無条件降伏することにもなったのです。細かに分かれた藩を上回る、大きな統合が目指されたのです。その核になるのが、天皇でした。

明治天皇制は、軍事力強化による国家の独立と、経済の発展とを、

昭和（一九二五）になって、日本資本主義は、軍国主義と結びついて発展していきます。それは、天皇の宗教的（神話的）な權威を利用する、「天皇制」でした。戦前／戦中の体制には、いろいろな要素が含まれています。軍部は、国内の人間と物資を統制し、徴用や供出を命じましたが、これは日本人が経験した最も大規模な計画経済の試みです。軍部には、資本主義（財閥）を憎む軍人も多く、農本主義（農民を中心とする平等な社会を理想とする思想）の影響もありました。婦人が公式に社会参加する道も、大日本国防婦人会が可能になりました。戦争目的を遂行するために、全てが根こそぎ動員されましたが、それは天皇の名前によって可能でした。天皇が、日本人を国民として自覚させ、国家に組織したとさえ言えるのです。

昭和の大動員体制は、都市と農村を巻きこむ大運動でした。そこには、合理的な要素と非合理的な要素が、混在しています。たとえば、戦争目的も明確でなく、天皇に対する感情も神秘的なものです。敗戦のち、軍部が悪く、自由がよいことになりました。その結果、農本主義も二度と日本人をとらえなくなりました。けれども、農民を含む日本人全体が、目的合理的な集団行動を経験した事実は、戦後の高度経済成長を支える行動規範として、残りました。

* 軍部がなぜ力を伸ばしたのか。その理由の解明は、日本人の責任です。

一八八九年の憲法（大日本帝国憲法）は、天皇を立憲君主とする体制です。天皇は主権者ですが、実際の決定はすべて内閣が行ない、

天皇には政治責任がありません。この憲法は、自由民権運動に対する妥協の産物でしたが、それ以上に、条約改正を目的とする国家制度の近代化の一環でした。政府は、国民大衆の政治参加を恐れていましたから、議会の権限を小さなものとししました。そして、元老・重臣・軍人からなる指導層が順に政権を担当しました。

ここで生じたのは、律令制の歪みとよく似た現象です。憲法の枠はそのままでしたが、そこに規定のない会議（元老会議・三長官会議……）がしばしば実質的な決定を行ないました。国家の権限を国民の権利より優先させていたために、国家機構の一部である軍が、憲法に定めのない方法で影響力を行使しはじめると、それをチェックする手段が、国民にも政府にも天皇にもありませんでした。そして、現状に希望をもてない国民の一部が、軍人に希望をもつようになり、国民の未熟な政治意識を土壤に、近代的な国家機構に巣喰った癌。それが軍部です。

*

戦後の日本人は、軍服を背広に着替え、政治を忘れて「日本株式会社」に没頭しています。沢山の企業が激しく互いに競争していますが、個々の企業は軍隊によく似ています。そして、全体をどう導くか、誰もあまり責任をもつて考えていない点は、戦前と似ています。

5 遅れて来た巨大国家・中国

日本の近代化を考えるのに、中国との比較が有効です。

中国は、あまりに完成した文化をもち、あまりに広大です。また、日本は外国を手本にするのに慣れていますが、中国はその経験がありませんでした。そのため、日本が先を越したかたちになりましたが、二十一世紀の早い段階に、中国は世界最大の（超）近代国家となるでしょう。

ここでは、三つの問題について簡単にのべます。第一に、なぜ中国は、日本と違って、いち早く近代国家に脱皮できなかったか。第二に、解放後の中国近代化は、どういう性格のものだったか。第三に、中国近代化の今後の道筋について。

*

第一の問題。列強による侵略と植民地化が、近代化を阻んだのはもちろんですが、それ以外の要因にも注目すべきです。

当時、中国の旧体制（清朝）は、異民族の王朝でした。日本と同じく儒教（朱子学）を正統としていましたが、日本と違うのは、朱子学を否定できる、別の正統観念をもった思想（日本の蘭学や国学にあたるもの）が、儒教の内部に存在しなかったことです。天皇に相当する、現政権と異なる伝統的権威もありませんでした。漢民族の自立（滅満興漢）を主張するだけでは、近代的なナショナリティを形成できません。そのため中国独自の近代的な政治思想（孫文の三民主義）が出てくるまで、待たなければなりません。というのは、民主主義が、欧米侵略者の文化だとみなされるからです。

*

第二に、中国近代化の性格。近代的な政治思想による統一が失敗し、そのかわりに、共産党による統一が成功したことは、日本と対照的です。毛沢東は革命の過程で、天皇に匹敵する、民族の象徴的な中心としての権威を発揮しました。

中国共産党は、日本をはじめとする列強の植民地支配を排除し、あわせて、国内の封建勢力を打倒することを目標としました。そして、共産主義を、大多数を占める農民の運動として組織することに、革命を成功させました。この過程で、儒教や道教の伝統的な要素を少なからず吸収したようにも（日本人の私には）見えます。

テキストが政治と直結する点は、共産主義も儒教も似ています。共産党が、その解釈権を独占します。社会主義中国が、儒教の体制と異なるのは、テキストの権威が中国だけで完結しないことです。マルクス主義はヨーロッパ起源の思想で、党も本来は国際的な組織です。中ソ論争の結果、中国共産党は、テキストの解釈権を手中にしました。これは、中国の社会主義建設を安定させましたが、その分だけ伝統的な体制に近づきました。

マルクスの考えた共産主義は、資本主義の遺産をそっくり受け継ぎ、近代市民社会が姿を変えて高次の社会に到達しようとする運動でした。ところが中国は、資本主義も近代社会も未発達だったので、社会主義建設が同時に、近代化でもあるわけです。このため、資本主義社会のあれこれの制度を、これから達成すべき目標とみるのか、それとも克服すべきものとみるのか、判断がむずかしくなっています。

第三に、中国の今後の進路について。

中国では伝統的に、もともと価値の高い社会活動が政治でした。ここで政治の究極目標は、中国人民の幸福を達成し、あわせて中国に、それにふさわしい国際的な地位を確保することである。そのため的手段として、中国の近代化があり、そのまた手段として、社会主義（中国共産党の指導）がある。——そう、私は理解しています。いっぽう日本は、資本主義国として生きていく道を選びました。日本と中国の今後を考えるにあたって、社会主義と資本主義の関係をよく見きわめておくことが大切です。

資本主義の本質とは、何でしょうか。マルクスの『資本論』によれば、それは搾取のメカニズムです。レーニンはそれに続けて、帝国主義と植民地支配が避けられないと説きました。毛沢東の思想は、これを中国の現実に適用したものです。そして、中華人民共和国が誕生しました。

『資本論』は優れた、希有の書物です。しかし、近代経済学の側からは批判もあります。批判は主として、労働価値説の成立に関係します。サミュエルソンや置塩信雄の仕事が踏まえた、森嶋通夫の『マルクスの経済学』は、その集大成です。彼は、『資本論』が採用しているモデルに厳密な数学的表現を与え、マルクスの主張が妥当する（しない）ための前提を明示してみせました。これによれば、労働価値は条件つきで成立つ（条件つきでしか成立たない）概念です。価値が成立たなければ、剰余価値、搾取といった概念も成立ちませ

私はこうした仕事を検討した結果、資本主義を、『資本論』とは違った仕方では定義すべきだと考えるようになりました。簡単にいうと、資本主義とは、資本・労働・土地を、競争市場を通じて、もつとも効率的に配列する分権的なシステムのこと、それ以上でも以下でもありません。このいみでの資本主義は、搾取と無関係で、民衆の幸福とも矛盾しないはず。しかも現在までのところ、これを上まわる経済の運営方法は知られていません。この思想に従って、資本主義を前進させていく道があると思います。

それではなぜ、マルクスやレーニンの時代に、資本主義はあれほど狂暴だったのでしょうか。ひとつには、資本の原始蓄積過程が進行していたため、もうひとつには、生産効率（生産関数の形状）の極端に異なる複数の市場が結合されてしまったことによる副作用のため、と考えられます。そうした要素は、資本主義自身が克服します。

解放後の中国は、大胆に社会改革に取組みました。その結果、近代化の最低限の条件が整いましたが、問題は、資本をどのように調達するかです。国内だけで調達すれば、非工業部門に大きな犠牲を強いることになるか、あるいは経済の停滞をまねきます。いっぽう、外国から調達すれば、再び従属の道を歩む危険があります。中国は最初、同胞であるソビエトの援助を頼り、苦い経験を重ねました。その後、自力更生を旗印に掲げましたが、世界の趨勢に遅れをとりました。今日、資本と技術力は一体であって、世界に通用する技術力なしには、自国の近代化を進めることもできないのです。このこ

とを悟った中国は、資本主義国からの資本・技術の大々的な導入にふみきました。経済の自由化・開放政策は、後戻りのできない、重要な選択でした。

こうして移入した資本・技術を核にして、近代化を推し進めるには、国内の社会制度が効率的に運用されることが前提になります。率直に言うと、中国の社会主義体制（計画と、党の指導）と、市場経済とが、どこまで調和できるかが鍵になります。

これまで何回か試行錯誤があり、いまま物価上昇など、若干の問題を抱えています。これから問題は、もっと大きくなるでしょう。党・政府の決意は固いのですが、それは、資本・技術の導入に関してであり、資本主義の復活などは問題外です。そこで、中国の経済が順調に回転しはじめると、それにふさわしい社会制度の枠を要求する動きと、それを社会主義の枠に押しこめようとする動きとが、深刻に対立するのではないかと予想されます。

そこで私の見解ですが、中国は、数十年をかけて徐々に資本主義諸国家の社会制度を採用するのが賢明だ、と思います。そうやってはじめて、中国革命の目的が達成されるのです。またそうして中国の近代化が実現すれば、世界の平和と安定にも役立つでしょう。

中国の近代化は、アメリカならびに日本との関係が良好でなければ、不可能です。日本はアメリカを最大の輸出市場として、成長をとげました。しかし人口の点からも巨大な中国は、日本をまねて、輸出に頼って経済を拡大しようとしても無理です。国内に有効需要を作り出すしかありません。それには、経済効率・勤労倫理・消費

文化・その他、経済が合理的に運営できる条件が根づいていることが不可欠です。これらは、現在の中国に欠けています。

中国の人びとは、資本主義について大変悪いイメージをもっています。あくどい金もうけ主義、苛酷な労働、等々。法の支配・プライバシーの尊重・民主政治……の伝統のない中国で、いきなり資本主義が復活すれば、そうなるおそれは多分にあります。けれども、そうした近代的な社会制度を整えば、資本主義が有害な制度だとは、必ずしも言いきれないでしょう。

資本主義にはいろいろの側面がありますが、それを社会主義の一形態と理解することもできると思います。私は別の機会に、その理解を詳しくのべてみるつもりです。

ここまでのべたのは、ひとつの考え方にすぎません。中国の方々と同じように考えてもらいたい、というのではないのです。しかし、中国の社会主義建設が、少なくとも日本資本主義と同程度かそれ以上の成功を収めるのであれば、満足なさらないでしょう。日本の資本主義も今後、前進を続けると思いますが、経済の自由化の実験を進めつつある中国の社会主義と、今後、よいいみでの競争相手として学びあうことができれば幸いです。

日本人は忘れやすい国民ですが、それでも過去から多くを学びました。日本資本主義が軍事的な覇権を求める可能性は（こ）しばらく）まずありません。けれども、単に邪魔をしないだけでなく、中国のプラスとなることが大切です。体制が異なるとしても、究極に

は同じ目標（人類の平和と幸福の追求）を目指して、両国が協力できると思います。そのために、社会科学者の率直な交流が拡大することが、有益であると信じます。

文献

- 橋爪大三郎 一九八八 「中国将成世界的超大国」『朝日ジャーナル』別冊 一九八八・四・二〇号。
- 石井 良助 一九八二 『天皇——天皇の生成および不親政の伝統——』山川出版社。
- 丸山 真男 一九五二 『日本政治思想史研究』東京大学出版会。
- 山本 七平 一九八三 『現人神の創作者たち』文藝春秋社。

*本稿は、一九八八年八月上海社会科学学院で開かれた研究懇談会の席上、「日本の近代化をめぐって——中国との比較」と題して報告（配布）した原稿とはほぼ同一です。ただし5節は、今回大幅に加筆しました。

* "Capitalism And The Strategies Of The East : On the Modernization of Japan and China".
by HASHIZUME Daisaburo 1988©

——僕はマルクス経済学の出身だから、資本主義というと、マルクス経済学的資本主義をイメージしちゃうんですけど、それ自体橋爪さんもおっしゃっているように、有効性を問われている。橋爪さんのこの論文では、日本と中国の近代化の問題から、資本主義について考えられていますが……。

橋爪 この夏、一ヶ月ほど中国に行ってきたんですが、たまたま上海社会科学学院の方々と一緒に研究会をもと、ということになりました。私の分担当は、「日本の近代化」でしたが、テーマも急に決まったので、上海で慌てて論文にまとめたようなわけです。

中国には前から興味をもっていたのです。ギリシャ・ローマは、ヨーロッパ世界で古典としての地位を占めています。それと同じで、中国は、日本に制度的なバックボーンを与えてきました。日本も、自分の古い層をみておかなければ、自分の社会についてきちんとした自覚をもてない。中国を理解することは、日本が自立するためにどうしても必要なのに、その理解はできていないようできていないのではないか、と思いました。それはたとえば、儒教や仏教の見直しですね。日本におけるフーコーの対応物があるとしたら、こういう仕事でしょう。記号論とか解釈学とか、せっかくだらう方法論ができたわけです。最新の方法を駆使して、日本を理解するために中国やインドを理解する。方法がなければ作りだしてでも、理解する。そういう線が、中国に興味をもつ理由のひとつ。

もうひとつは、もつと現代的な関心です。日本はあるいみで、現代の最先端を走っている。よくローラーゲームにたとえるんですが、前に図体のかいのがいて、後ろのをひっぱると、体重の軽いのは前のほうにすつとんでいく。日本は体重が軽いので、アメリカにひっぱられて前にとび出していった。自分の力できび出したのでもないし、いつまで前にいられる保証もないわけです。それで、順番を見てみると、中国という非常に図体のかいのがいます。アメリカと日本がひっぱってもすぐ前には行かない。ということは、さしあたりマイナスですが、前に行った場合にはすごいわけです。もうちょっと長い目でみると、非常に大きな存在になるだろう。その線はまだよく追えてないんですけど、ソヴィエトではあるまい。インドはちょっとむずかしい。となると、やっぱり中国であろう。中国をよくみておかないと二十一世紀はわからないのではないか、と思うわけです。

一口に「遅れた」と言われても仕方がないことが、中国には山のようにあります。それから、「中国」であるがゆえの問題も、いっぱいある。でもその一方で、先端的な部分もあって、たとえばロケット工学とか、コンピュータ関係とか、そういう進んだところはもう非常に進んでいるわけです。それらのことが、一応「社会主義」というシステムのなかにありまして、北朝鮮あたりに言わせるといふ「混乱の極み」なんです。非常に面白い状態にあるわけです。

中国は、社会学が永らく禁止されていたこともあって、ごく若い人を除くと、社会学と呼べる人が存在しない。歴史学、哲学、国際関係論……といった学問が、その代わりになってきたみたいです。

そういう人たちが何を考えているかというと、近代化、あるいは現代化ということです。現代化は、現在の党の方針で、公認されているんですが、外すことのできない大枠がはまっている。ひとつは中国共産党の指導。計画と社会主義の枠です。もうひとつは、それにもかかわらず日本を凌ぐような近代化・現代化を達成すること。これも至上命令です。このふたつの両立はなかなかむずかしいわけですよ。これからどういう像を描いたらいいのか、自分でも悩んでいるふしがある。

保守派と改革派、この二派があるとすると、保守派はやっぱ、現在の体制に既得権益を見出す人びとをバックにしているので、官僚とか権力をもっている人びとは、新しい試みに抵抗感があつて積極的でないわけです。それに対して、改革派の人たちは、たとえば市場の効率を重視します。最終的に社会主義を実現するためなら、党のコントロールのもとに、かなり大胆に自由を認めてもいいではないか、と考えます。

中国の社会科学は日が浅いので、まだ発言力が大きくない。中国では、貨幣供給量の調整や中央銀行の制度をどうするかといった、初歩的なインフレ対策みたいなものがいまだに定着していないんですね。そういうノウハウは入れたいようだし、理論的な裏づけもほしい。今後学者が実力を蓄えれば、無視できない勢力になるでしょう。

う。しかし、党との関係は、むずかしいものがある。党と学者の意見が対立してしまつて、そのあと党の方針を変えてしまつた場合、学者の立場は厳しいものになるでしょうね。

ところでこれは私の印象ですが、近代化と言うけれども、要するに資本主義化のことじゃないかと思うわけです。中国は過去、三回ぐらい近代化のチャンス逃しているんだ。明朝の盛期、清朝の末期、孫文の革命運動。そう言つて残念がる。今度は四回目だ、今度こそ、というわけです。中国は、ひと足先に社会主義体制を確立したのに、近代化のほうをまだ達成していない。順序が逆なんです。

——それは、工業化とはちがうんですか？
橋爪 工業は一応あるわけですが、まず資源がない。技術がない。必要な物が無い。資本主義は猛烈なスピードで動いてますからね、単に去年より伸びたからいいという話じゃない。オリンピックと同じで、いくら自国の記録を更新しても、世界記録と差が開いてはだめなんです。世界レヴェルに達したいのですよ、中国は。そのためにはソヴィエトではなく、アメリカや日本との連繋が不可欠だという選択が、動かしがたいものとしてあるんです。しかも、国内は共産主義でなければだめだということも、動かしがたい。いずれにせよ、国内の大改革が必要である。

近代化というと、日本では語りつくされた問題で、まったくリアリティがないですが、ちょっと海を越えた中国では、一〇億の人間の運命がかかっている、切実な問題なんです。私は日本では、近代化論がどう間違っていたのかと考えていたのですが、中国でそうい

うことを言っても空振りになってしまふ。中国では、ストレートに近代主義者流に考えていくほうが、まだしも現実味がある。

ふつうの近代化論は、どうやら、明治維新や江戸時代、中国なら清末の改革、その辺をスタートラインにして考えていくらしいんです。同じ封建社会から出発しながら、その後の日中の歩みがどうして別々のものになってしまったか、という具合に。でもおそらく、最近日本では、もうあまりそういう議論をしないだろう。少なくとも戦国、安土桃山時代にまではさかのぼるだろう。「封建社会」という概念は歴史学では成り立たなくなつて、幕藩制とか、日本中世とかいう議論をたてる。中国には、中世といえるような段階がありませんでした。官僚制的であっても、封建的主従関係ではないんですね。マルクス主義では、前近代といういみで封建社会という概念を使いますから、ウェーバーみたいに封建制／官僚制を分けたりする記述をあまり重視しなかつた。けれども、その辺を詳しくみていた方が、日本と中国を記述し分る場合は有効なんじゃないかなあ。

——橋爪さんは論文の中で、日本の近代の連続性を支える軸としての天皇制、という話をされていますが……。

橋爪 感覚としてはみんなわかっていることでしようけど、それがちゃんと言えたら大したことですよ。たとえば中国には天皇はいなくつて、皇帝ないし天子しかない。天子というのは実体のある存在で、打倒されてしまうかもしれない存在です。天皇の場合、打倒されないように、実体があつてはだめなんです。天皇というのは日本の社会的原理がうまく作動していること、しるしみたいなもの

のだと思う。天皇は、その時々に応じて必要な社会的機能を調達するためのパイプみたいになっていて、その時々によって読み替えられていくんです。

伊藤博文はその辺に、非常に自覚的だった。旧憲法の体制を作つた伊藤博文は、ヨーロッパをひとわたり見学していますが、彼が言うには、キリスト教の機能的等価物がなければ、人的資源を日本国内で動員できないだろう。つまり、近代では、相当に高いモラルをそなえた人的資源を継続的に調達するのでないと、国家目標を達成できない、と。しかし一方で、島原の乱以来のキリスト教に対する警戒観もある。そこで天皇を、カイザー兼法皇であるという位置にもつてくる。要するに、宗権と俗権を兼ねそなえた首長にする。一神教に近いかたちの、一種の天皇教ですね。実定法の内部でも天皇を首長にいただき、そこに書ききれない部分を皇室典範に書く。皇室典範にも書ききれない部分が民族の津々浦々にバイキンのように蔓延するんです。伊藤博文は、いろんな手段を使って人びとを根こそぎ動員する、そういううまい装置の設計者ですね。非常に奇怪な部分もあつたが、とにかくこの装置によって、日本を近代の側に推し進めることになった。でも、日本の中に奇怪な部分を温存する、実に悪魔的な選択でもあつたわけですよ。いったん暴走すれば、天皇といえどもコントロールできない要素を内部増殖させる危険を孕んでいましたからね。たとえば、軍部。

伊藤博文に代表されるようなモラルは、みんな持っている。日本人の武士のインテリというのは、窮すれば必死になって、機能的

等価物を構成する。その材料は、日本の中から捜してくるんですね。そこで、天皇に新しい歴史的意味が与えられたんです。だから今日われわれがイメージする天皇制というのは、この時代に発明されたんです。発明されたんですけど、それが昔ながらの日本的な想像力の範囲で読解できるようにこしらえてある。

戦後の象徴天皇制というのはアメリカが考えた部分があるけれども、やはり戦前の天皇制に対するネガミたいになつちやつていて、無力な象徴といういみで、本来の天皇制に戻つたというふうにかえることもできるけれど、これもやっぱりあなたに発明されたんですよ。ただ、戦後は伊藤博文みたいな人がいない（いるかもしれないけど黒子になって隠れている）から、そのいみが必ずしもよく伝わっていない。不透明になつていってます。

——それから今後の論文では、丸山真男との対比で山本七平の議論を出して、山崎闇齋の重要性、そこに明治維新と明治天皇制を考へるひとつの鍵があるんだ、とおっしゃっていますね。

橋爪 闇齋学がイデオロギーとして人びと（下級武士）をとらえたといつても、尊皇攘夷だったのがすぐに開国になつちやつたりして、表層というのはいけこしい加減なものですね。サナギが成虫になるみたいに、幕府を倒しても機能的に近代として動くようなものを作り上げなくちゃならない、というようなモラリティーというのは、中国にはないものなんです。そのモラリティーの実体を、なんとか形でとらえなくちゃならない。丸山真男はテキスト・クリ

ティークでもつて、近代の意識をあぶりだしていったんだけど、どうもそうじゃなくつてね。そのやり方では届きにくかつた部分を、山本七平が深読みした。闇齋学って非常に便利で、幕府をぶつ倒してかまわないという思想ですから、そういうふうに思つたら誰でも過激派になれる。でも闇齋学なんて信じていたら、近代化もなにもできない。だからすぐに捨ててしまふ。そういういい加減さつていうのも、必要だつたらしいんです。

——日本の場合、近代化のモラリティーというとき、ウェーバーのいう「プロテスタンティズムの倫理」というのがそのまま成り立たないわけなんですよ。

橋爪 でも、その機能的等価物というのは、そこそこあるんです。武士の禁欲とか、禅の禁欲とか、いろんなかたちで。しらみつぶしに、いろんな学者が近代化の動因を捜しています。ひとつひとつの説明力というのは大したことないんですけど、そのどれとどのでなく、全部ひくくるとそれなりの効果をもつ。それが言葉や思想になりきれないものだから、記述に困るんだけど、それ（プロテスタンティズムの倫理）に類するものがあつたから、ここまできたんじゃないのかなあ。ただ、機能的等価物というのが自生的にあつたから、自力で近代になつたはずだ、というんじゃない。それはせいぜい、ナンバー2の思想だと思ふんです。外側から機能というものを課されると、その等価物を調達するという論理だから、自生的とはいにくい。だから、江戸社会はほつておいても産業革命を起こしたろうなんて、信じられない。

——橋爪さんは近代化の中でとりわけ対外関係について時代区分をなさっています。その時代区分と関わると思いますが、この論文では朝鮮の場合は侵出、中国の場合は侵略とお書きになっていますよね。日本が防衛的に出ている場合と、日本が侵略的に出ている場合とで日本の対外関係の一つの転換があるじゃないか、とお書きになっていますが。

橋爪 朝鮮の場合も侵略だったと思いますけど、おおまかに考えて区切りがあると思う。ただ、日本人の間ではその区切りがあまり自覚されなくて、連続的になっているかもしれない。防衛的な動機から、気がついてみたら、いつのまにか容易に侵略的な動機に転換してしまうのです。時期区分をしてみれば、明治二十二年、それから明治末と、大正期、昭和が切れ目でしょうね。

——大正期のデモクラシーが日本で果してどれだけ根づいたかについては、橋爪さんはかなり否定的に……？

橋爪 大正期っていちばんリベラルな可能性が出てきた時期ですが、失敗しているんだから否定的に評価せざるをえない。リベラリズムというのは、権力を極小化して、みんなの自生的な動機や行動を尊重し、民衆を信頼しなくちゃいけない。けれども、まだ啓蒙の段階なんだから、土俗的な農村なんかをそのままにしておくと、どんなことを始めてしまうかわからなくて困る、と知識人は思ってしまう。だから二足の草鞋を履く感じで、大正デモクラシーは徹底できない構造をもっていた。

——日本の近代化というものは天皇制をぬきに考えられないし、

ったのか、というふうを考えるべきですよ。

資本主義の定義ですが、私の掲げたのは、誰でも認める最低限の定義ですね。この定義で、資本と資本の運動ということが定式化できます。近代以前の社会では、これは成り立たないわけです。

——「もつとも効率的に」と言うときの効率的というのは、市場経済性ということと捉えるんですか。

橋爪 効率というのは、どこに単位をとるかに依存します。全体社会に一個だけ単位をとっても、効率というものはおそらく言えないんで、「分権的に」っていうことと関係があるでしょう。つまり、個々の企業が利潤という目標関数を持ち、個々の家計が效用という目標関数をもって、みんな自分のことだけを考えて行動するならば、効率性がそのつど定義できる。

——それは原則的な認識だと思えますが、それが搾取と無関係かどうかというのはむしろ話だと思えます。労働価値説は証明されているとは僕も思わないけれども、たとえば資本主義のシステムが民衆の幸福ということと矛盾しないかどうか……。

橋爪 それは逐一検証すべき、状況的な問題です。ペンサムも挫折したのですが、民衆の幸福が実体としてある、という議論はできないはず。もし言えば、政治の問題になる。民衆の幸福と矛盾するということを主張したければ、民衆の幸福というのをきちんと定義しておいて、それと矛盾する、ということを示す議論にしくつちやいけないんです。(矛盾すると言えない、ということとは、民衆が困っていないとか、ひどい目にあっていない、といういみじくないですよ。)

近代化に対する批判は天皇制に対する批判になるわけですか。

橋爪 「批判」といういみがわからないけれど、日本の近代化にはいろんな問題がありますよね。よかれ悪しかれ、きちんと考えて自分なりの決着をつけないと、先に進めないでしょう。日本には、時間が解決してしまった問題とずいぶん多いわけです。日本はそれで救われている気がします。

——マルクス主義的な発想をすれば、資本主義とは近代のある種の矛盾、その矛盾の基本とは生産力、生産関係、階級対立なんですが、そういう従来の一つの資本主義論が現在でもあてはまるかどうかは重要な課題だと思うんです。マルクスが、『資本論』を書いたときに、それが妥当するとされた時期が永い間あったわけですが、なぜそれが妥当するのか、世界が資本主義をトータルに理解できるようなテキストだと思えてしまったのか、という疑問がずっとあります。橋爪さんは「資本主義を、『資本論』とは違った仕方と定義すべきだ」というところで、「資本主義とは、資本と労働・土地を、競争市場を通じて、もつとも効率的に配列する分権的システムのことで、……」とお書きになっておられますが、それは近代経済学的な定義で、それは資本主義の必要条件についての定義とは別のことのような気がするのですが……。

橋爪 マルクスの記述が十分に妥当したから、有力な思想だったわけです。でも十九世紀に妥当して、二十世紀に妥当しないとすれば、やっぱり十九世紀にも妥当していなかったんだと考えるべきなんです。理論として間違っていたのに、どうして現実に妥当してしま

——資本主義は肯定すべきでも、否定すべきでもない……。

橋爪 資本主義それ自体は、なにもものでもない。

たとえば、工場法が施行されなければ、限界以上の収奪を繰り返してしまう資本主義というものも当然あるわけだし、そうじゃない資本主義というものもある。いまの日本はもう、女、子供に働かせて利益を見出す資本主義じゃないですよ。マルクス自身も、資本主義にいろいろな段階があると認めていたじゃないですか。私が考えているのは、日本のことじゃなくて、中国とソヴィエトです。中国とソヴィエトにももちろん、資本という現象はあるんです。

——機械装置といういみで資本という概念をつかうんですか。橋爪 そう定義してもよいですよ。いろんな定義ができますから。私が資本というのは、生産過程にある機械設備(中間生産物)のことですから、資本がなくなるわけではない。しかもこれは、どんどん高度になっていく。

ソヴィエト、中国がやろうとしているのは、要するに経済の自由化ですけど、結局、資本市場の創設(あるいはそれと同じ経済効果をもつ制度の導入)をしようとしている。資本市場があれば資本主義でしょう。つまり、企業を自由に設立することができ、設立された企業が自分の運動法則によって効率的にやっていく。非効率ならば倒産する。

そうすると、つぎに党と、財界、資本市場との関係が問題になります。共産党というのは本来、国家権力を独占し、民衆を指導して、資本主義が復活しないようにしていたはずなのに、今度は党が音頭

をとって資本主義を復活させようとしている。これでは、党の存在理由が否定されることとなります。復活させてよい資本主義と、復活してはいけない資本主義と、二種類あるんなら、話は別ですけどね。けれどもソヴィエト、中国としては、計画に替えて、もっと効率的な市場の自由化、開放化を進めていかないと、民衆の幸福な生活を実現できない。階級対立どうのこうのというよりむしろ、党の存在理由と、自分たちの運営している経済メカニズムに矛盾があるんです。

もしそうだとすると、共産党をやめたほうが話のはつきりしているかと日本人が言った場合、中国人としてはグサリとくるわけですね。それが、歴史的な課題に答えたことになるかもしれないでしょう。つまり、日本を追い出し、植民地支配から脱して、毛沢東の戦略が実現したら、こんどは中国共産党が、現代化の足を引っ張ることになってしまう……。

——論文の最後のところで「人口の点からも巨大な中国は、……国内に有効需要を作り出すしかありません。それには経済効率・勤労倫理・消費文化・その他、経済が合理的に運営できる条件が根づいていることが不可欠です」とお書きになっていますが、今まで橋爪さんがおっしゃって来た経済効率、勤労倫理、消費文化のあり方に対する評価とかなり違った印象を受けたくんですが、橋爪 それはそうですね。ここでは、資本主義経済をうまく運営したいんなら、という条件つきでのべています。そもそも資本主義がいかどうかということになれば、無条件でいい悪いは言えません。

資本主義の中に生きていければそれはいいものと思えるだろうし、資本主義とまったく無関係な人間は、それがいいと考えるかどうかわからない。たぶん、えらい迷惑だと思っだろう。規律訓練されたり、時間を守って身ぎれいにしなくちゃいけなかったりするの、きつと嫌ですから。

——日本で暮らしている人をみた場合には……。

橋爪 価値問題を抜きにして、事実関係をみていくと、人口の問題が大きいのと思います。生産力ないし効率をあげないで、現在いる人口を支持するというのは、ほとんど不可能なんです。資本主義が出現してからもかなり時間がたって、これだけの人口がいるわけです。資本主義の生産力（人口支持力）を前提として何億という人間がいるのですから、もしそれをやめると言うなら、現在いる人間にどこかへ行つて（死んで）もらわないとだめですね。そういう思想はおそらく現れないだろうし、選択の余地もありません。資本主義をどう変えるかという発想はありうるけれど、資本主義をやめてしまえという発想は、非現実的でしょう。

——どう変えるかというときの具体的な手掛りとはどういうところでしょう？

橋爪 マルクス風の言い方なら、生産力を高めていく、という結論に落ちつくでしょう。しかし、人間が互いを、生産力としてしか必要としない、という共存の仕方に問題があるのです。そこに手がつくようでない、根本的なところは何も変わりません。

（はしづめ・だいさぶろう）